# 1　北魏平城出土瓦の基礎的研究

劉 俊 喜
（大同市考古研究所）

## A　はじめに

紀元 386 年、道武帝拓跋珪は北魏を建国し、398 年に盛楽から平城に遷都した。これより大同は北魏の都城となり、孝文帝拓跋宏の太和 18 年（494）に洛陽に遷都するまで、計 6 帝 7 代、97 年間つづいた。この 1 世紀の間に平城宮においては大規模な造営がおこなわれ、方山永固陵、円丘、明堂などの大型陵墓や礼制建築および雲岡石窟寺院、方山思遠佛寺、永寧寺、皇舅寺などの寺観はみな相応の規模をそなえていた。洛陽遷都以前に首都平城はかなりの規模で壮観な建物群を建設し、もともと荒涼とした小城は壮大な国際的都市に変貌した。

1995 年と 1996 年に発掘した明堂遺跡は大同市柳航里住宅小区付近に位置し、北魏太和 15 年（491）に造営した重要な礼制建築である[(1)]。遺跡は 100 畝（667a）近くあり、直径は 290m におよぶ。主体建物である明堂は遺跡の中央に位置し、方形の版築基壇は一辺約 43m ある。外周には円形の濠がめぐり、周長は約 900m、幅 6～16m、深さ 1.4m 前後、両側は砂岩を積み上げて側壁とする。円形濠の内側には東西南北に各 1 門あり、それぞれ中央の建物に対応している。2003 年に発掘した大同市操場城街東側に位置する北魏 1 号建築遺跡[(2)]は、版築基壇の規模が東西 44.4m、南北幅 31.8m、版築層の厚みは 2 m ある。出土遺物は北魏の黒色磨研の丸瓦と平瓦が主体である。2007 年 6 月に発掘した操場城 1 号遺跡の北 150m のところで、北魏の倉庫跡を検出した。4 基の地下式円形建物は東西向きに整然とならび、底部には炭化した殻つきかあるいは脱穀したアワが残っていた[(3)]。同時に、いくつかの北魏時代の建築材料が出土した。1981 年に発掘した方山思遠仏寺遺跡[(4)]、1993 年に発掘した雲岡石窟第 3 窟前遺跡[(5)]も大量の建築材料が出土した。2005 年、日本の研究者が大同で調査をおこない、上述の遺跡から瓦を採集した。

以下では、発掘した遺物と採集資料とを総合したうえで、北魏平城遺跡で出土した瓦について再度検討をおこなう。

## B　平　瓦

平瓦は、大同の北魏時期の瓦のなかで数量がもっとも多い。その作用は屋根の葺土の上に仰向けにして敷き詰め、屋根から雨漏りがしないようにする。その製法は手づくね、あるいは模骨を使用して、上部が小さく下部が大きい円筒をつくり、刃物で円筒の内側から切り込

みをいれて４分割し、４枚の平瓦にする。

大同における北魏時代の平瓦は灰色（均質な胎土で還元炎焼成）で、平面は上が小さく下が大きい台形を呈する。やや狭い一端を狭端（原文では「小頭」）、幅広の一端を広端（原文では「大頭」）とする。広端面はすべて波状文をかざり、狭端面にも一部に波状文がある。断面は円周の約４分の１を呈し、凹面は研磨して黒色を加える。凸面はミガキがあり、無文の黒色か灰色。両側面には分割痕跡がある。全体に重厚で硬く焼きしまる。瓦の大きさ、厚み、色調、類型などは平瓦の大型化と多様化を示している。

製作技法や色調光沢、規格の違いによってⅠ～Ⅲ式に分類した。

Ⅰ式：凹面、凸面は黒色磨研で、一部に赤色もある。胎土は緻密で焼成は硬質、質も比較的良好である。出土量は少なく、破片のみである。完形品の寸法は不明。

Ⅱ式：凹面は黒色磨研で表面はかなり緻密で光沢がある。凸面は無文の黒色か灰色。広端には波状文がある。この種の形式の平瓦は全体の 90%以上を占め、凹面を上にして葺く。操場城１号遺跡 T510③：13（附図１－２）は、凹面が黒色磨研で凸面は黒色無文、広端に波状文がある。長 81 ㎝、広端幅 60 ㎝、狭端幅 50 ㎝、厚さ 2.8 ㎝。操場城倉庫遺跡の M204 は、凹面が黒色磨研、凸面は黒色無文。広端面に波状文があり、長さ 55.5 ㎝、広端幅 37 ㎝、狭端幅 31.2 ㎝、厚さ 2.8 ㎝。

Ⅲ式：凹面布目、凸面は灰色無文で広端面の下辺に手捻りの波状文がある。一部の資料では、凹面広端縁と凸面狭端縁にも手捻りの波状文がある。この形式の平瓦は量が少なく、ミガキもおこなわない。全体につくりが粗雑で、熨斗瓦に用いたと考える。操場城１号遺跡 T201 は、凸面灰色無文、凹凸面広端縁と凸面狭端縁に手捻りの波状文があり、長 46 ㎝、広端幅 36 ㎝、狭端幅 31 ㎝、厚さ 2 ㎝。操場城倉庫遺跡 M201 は凸面広端縁に手捻り波状文があり、広端面の厚さは 1.2 ㎝ほど。長 45.5 ㎝、広端幅 30 ㎝、狭端幅 24 ㎝、厚さ 2.2 ㎝。

平城遺跡で出土した平瓦の広端面はすべて波状文があり、波状文の１単位は半円形で、細尖形と小方形などのバリエーションがある。それらは、先端の断面が円形の工具で施文するか、指で捻り出してつけた文様である。施文は焼成前である。

波状文の類型はⅠ～Ⅳ式に分けられる。

Ⅰ式：平瓦の狭端面と広端面に波状文

Ⅱ式：平瓦の凹面広端縁は無文、凸面広端縁に波状文（附図１－３、附図３－１,２）

Ⅲ式：平瓦の凹面広端縁は無文、広端面の中央に錐状工具でつけた１条の比較的深い沈線を境にして、その下辺（凸面広端縁）に波状文（附図１－２、附図３－３）

Ⅳ式：平瓦の凹面、凸面広端縁に波状文（附図１－１、附図４－３）

一部の平瓦には文字があり、字数は１文字から３文字までと異なる。ヘラ書きは焼成前で、鉄製か木製の工具を使用している。また、指頭や爪で書いた文字もあるが、大部分はヘラ書きである。瓦工人は凸面に文字を書いているが、ほとんど書きなぐっている。ヘラ書きの位

置も定まらず、規則がなかったと思われる。最大の例は７×９㎝角、最小は３×４㎝角ある。書体は隷書、楷書、行書、草書があり、ある文字は勢いがあるが、認識できないものもある。文字の内容はおもに工人の姓名あるいは検品係の姓名であり、製作の過程で数量やその他の記載をする。たとえば作業内容や秘密の程度をあらわす専用の記号や刻文がある。

平瓦上の文字には、興（附図３－５）、兵、相、生、俟、頭（附図３－４）、五、七、白、奴、知、七頭、皇、十七頭、高（附図２－４）、徳、成、洛、清、泉、伏、貴、田（附図２－６）などがあり、大部分は鉄あるいは木製の工具で書いたものである。ただし、興と生の字はあきらかに指頭や爪で書いている。姓があって名のないものは、白、高、田。名のなかの一字を取ったものには、興、兵、相、奴、生、徳、成、洛、清、泉、伏、貴がある。五、七は数量をあらわし、頭、七頭、十七頭も数量か人名を示している。皇は作業内容である。

### Ｃ　丸　瓦

丸瓦は、大同の北魏時代の瓦磚のなかでは出土量がかなり多い遺物である。その機能は、２枚の平瓦が接するところに覆いかぶせ、雨水が瓦の隙間から染み込むのを防ぐ。作り方は、まず粘土紐を巻き上げるか、あるいは模骨をつかって円筒をつくり、その後、上方に玉縁を作り出し、最後にナイフ状工具で筒の外側か内側から切り込みを入れて分割し、２つの丸瓦を作成する。

大同における北魏時代の丸瓦は、粒子の細かい胎土で、横断面は半円形。凸面はミガキをかけて黒色にするか、無文の灰色を呈する。まれに、青灰色や黄色を呈するものもある。凹面には、模骨を包んだ布目の痕があり、両側面には分割痕跡、後端には玉縁があり、ここに別の丸瓦が重なる。

製作技術と色調の違いによってⅠ式とⅡ式に分類する。

Ⅰ式：凹面は布目、凸面はミガキで黒色に塗る。この種の形式の丸瓦は全体の 90％を占めるものの、大小に違いがある。操場城１号遺跡 T410③：3 は凸面が黒色を呈し、胎土は緻密でミガキをかける。凹面は布目痕跡がのこる。全体は比較的大きく、つくりも精緻である。全長 75.5 ㎝、直径 23 ㎝、厚さ 2～3 ㎝、玉縁長７㎝。操場城倉庫遺跡 T517L204③は、凸面黒色、胎土は緻密でミガキを施す。凹面には布目痕跡があり、玉縁凸面に「白」字がヘラ書きされている。全長 57 ㎝、直径 18～18.3 ㎝、厚さ 1.7～2.5 ㎝、玉縁長 5.8 ㎝。

Ⅱ式：凹面は布目、凸面は灰色で無文。操場城倉庫遺跡 T613③：2 は凹面布目、凸面灰色無文で、全体に燻しの痕跡がある。丸瓦の広端は蓮華文瓦当と接合する。製作法は、まず瓦当裏面に細い斜めのキザミをいれ、丸瓦と接合後に手で接合箇所を円弧状にナデつける。丸瓦の残存長 19 ㎝、直径 14.5 ㎝、厚さ 1.5～2.2 ㎝。

方孔をあけた丸瓦は軒丸瓦である。方孔は、通常、一辺が 16.5～17 ㎜。土製の瓦釘をこの穴に打ち込み、軒に固定する。丸瓦の広端は瓦当と 90 度の角度で接合させる。瓦釘は明

堂遺跡や操場城１号遺跡で出土しているが、完形品はない。軒丸瓦は胎土が緻密で、凸面はミガキを施して光沢があり、多くは黒色だが、熱をうけて浅黄色に変化したものもある。瓦釘の形は菱形で、中央に４つの孔があり、下方には長い柄をもつ。柄の断面は扁平な長方形で、ちょうど丸瓦の方形孔に合わせてある。瓦釘の形は、偃師龍虎灘にある北魏官衙遺跡で出土したものと類似している[(6)]。

文字のある丸瓦は、１～４字とばらつきがある。文字を刻むのは焼成前で、刻字の工具は鉄と木を組み合わせた尖頭の工具である。大部分は書き付けた陰文で、一部、スタンプや篆刻の陽文がある。瓦工人の棟梁の文字はすべて玉縁凸面にあり、字体は、場所が限られているため、かなり規則正しく詰めて書いている。隷書がもっとも多い。そのほか、スタンプの楷書や楷書化した篆書がある。文字の内容は平瓦と同様で、工人の姓名や品質検査係の姓名、製作過程中に数や備考を記したもの、工程の内容や等級を示すスタンプや刻文がある。

丸瓦上のヘラ書き文字には、おもに李、買徳、道、侯、白、奴、胡、阿仁、徳、六、□日人走、莫、香（附図２－５参照）、香盧、百又六九、非、伯、天、保など、スタンプ文字には範黒太、容、莫問、皇などがある。

このうち、姓名がそろった例は範黒太と阿仁で、姓のみのものは、李、侯、白、胡。名前のみのものは買徳、香盧。名前から一字とったものは、道、奴、香、徳、非、伯、天、保、容などがある。造瓦の過程で数やメモをあらわしているのは、六、□日人走、百又六九である。工程の内容や等級を示すのは、莫、莫問、皇である。

明堂遺跡の丸瓦 96MN : 20 は、玉縁凸面に阿仁の２字が書かれている。阿字はいきいきとし、仁字は落ち着いて誠実であり、現存する魏碑の書体のなかでも上出来の作といえそうである。明堂遺跡と操場城１号遺跡から出土した数点の丸瓦の玉縁凸面に書かれた香、香盧の２字は、下部を日ではなく田につくる。この種の書き方が、当時、民間で非常にはやっていたことがわかる。明堂遺跡 96MN : 7 の丸瓦は、玉縁凸面に奴字を書き、操場城１号遺跡出土の奴字と非常に類似している。瓦の刻文は明らかに同時期のものであり、同じ奴という名の工人の手になるものである。

丸瓦のスタンプにある範黒太や容の字体は、楷書化した隷書である。皇字は皇室の工房の印であり、莫問は作業中に規律を守るべきという要求か、あるいはそういう決まりがあったことを示している。この両種の字体は、事実上、一種の楷書化した篆書であり、方山思遠仏寺、操場城１号遺跡などで発見された「富貴萬歳」、「傳祚無窮」などの北魏瓦当の文字の風格と異なり、古朴かつ端正で、規則正しく簡潔な特徴をもつ。

### D　軒丸瓦

大同北魏時代の軒丸瓦の胎土は、緻密で堅緻。表面は黒色でミガキが施され、光沢がある。また焼成技術によっては青白色、紅色を呈するものもある。瓦当の文様には文字、蓮華、獣

頭、人面などの図案があり、これらが４大類型となる。瓦当は型づくりで円形と半円形の両種がある。瓦当の文様は時代の特徴を現しており、標識としての意義がある。

**（ｉ）文字瓦当**

「大代萬歳」「皇魏萬歳」「萬歳富貴」「傳祚無窮」「永寿□長」「□賢永□」「□□太□四年」などの瓦当がある。文字の内容から分類すると、吉祥語と紀年の２種類になる。

「大代萬歳」瓦当は城東の建設現場で採集した[7]。瓦当面は、井字で９つの方格に分割される。中央には大きな乳釘をおき、その四隅に小乳釘がある。乳釘の外側には凸線の圏線が巡る。字体は上、下、右、左の順で隷書の陽文が書かれる。瓦当の直径は 21 ㎝、厚さ 3.3 ㎝、外縁の幅 1.5 ㎝である。外縁の内側には凸線の圏線が一周めぐる。操場城１号遺跡でも類似した瓦当片が出土している。

北魏王朝の前身は代国である。310 年に穆帝猗蘆は、晋の并州刺史劉琨を助け、反旗を翻した白部大人を撃破した。つぎに匈奴の末裔の劉虎を攻撃して、その営舎集落で虐殺した。「晋の懐帝は帝に大単于を進め、代公に封じた。……６年（313）に盛楽を築き北都とし、故平城を修理して南都とした。……８年（315）、晋の愍帝は帝に代王になることを進め、官属を置き、代と常山の２郡を食封とした」[8]。338 年、昭成帝什翼健が代王に即位し、在位 39 年。376 年、国内は大いに乱れ、代国が滅亡した。386 年、拓跋珪が国を建て直し、代王を称して都を盛楽に定めた。この年の四月に、改めて魏王と称し、国号も魏とした。398 年に平城に遷都し、拓跋珪は皇帝を称した。この後、平城を代と改名し、同時に平城を代京、恒代、代都、旧代などと称した。

「皇□□歳」瓦当は、操場城１号遺跡 C1 で出土。胎土は緻密でミガキをしていない。瓦当の中心文は大きな乳釘で、斜め方向の４つの辺にはそれぞれ等距離に小乳釘をかざる。乳釘の外の圏線はみな凸線である。大、小の乳釘の間には３本の短い凸線がつながり、４つの小乳釘の間に「皇□□歳」の４字がある。上、下、右、左の順に隷書の陽文を書く。瓦当の径は 15 ㎝、外縁幅は 1.2 ㎝、外縁の内側には凸線の圏線が一周めぐる。2004 年５月 10 日に操場城付近で１点の完形の「皇魏萬歳」瓦当が発見され、それは操場城１号遺跡 C１の瓦当片と字体や文様が一致する。欠けていた「魏」の字を補った意義は大きい[9]。

「萬歳富貴」の瓦当は、方山思遠仏寺（附図４－１）、操場城１号遺跡と雲岡第３窟の窟前遺跡などで出土した。瓦当の規格や装飾と文字には差異がある。瓦当面は、井字で９つの方格に分割される。中央には大乳釘文があり、四隅には小乳釘文を配す。乳釘の周りには凸線の圏線がめぐる。文字のうち「万」と「貴」字の変化は大きくないが、「富」と「歳」字はいくつかの書き方がある。上、下、左、右と上、下、右、左の順によむ隷書の文字が書かれている。方山思遠佛寺 T110：2 は灰黒色で、瓦当面はミガキをかけ、大小の乳釘文の周囲には圏線がない。わずかに「萬歳□貴」の３字が残る。字体は上下右左の順によむ隷書の陽文。瓦当径は 16 ㎝、外縁幅 1.1 ㎝。操場城１号遺跡 T510③：8 は灰黒色で、瓦当面はミガキを

施す。瓦当面は凸線の井字形文で９分割され、中央に大乳釘文、四隅に小乳釘文をおき、乳釘の外側には凸圏線をめぐらす。字体は、上下左右の順でよむ隷書の陽文である。瓦当径 13.3 ㎝、外縁幅１㎝、この瓦当の文字は整っており、瓦当全体のつくりもよい。

「傳祚無窮」瓦当は、雲岡石窟第３窟前遺跡で出土した。雲岡石窟研究院にある。瓦当は井字をもって９区画に分割される。中央には大乳釘、四隅に小乳釘をおき、乳釘の周囲には凸圏線文をかざる。字体は上下右左の順によむ隷書の陽文で、瓦当径 15 ㎝、外縁幅 1.2 ㎝ある。北魏時代の「祚」字の意味は皇位をさし、「顕祖黙然良久、遂傳祚于高祖」(10)、「傳祚無窮」は永遠に皇位を伝承するという意味である。

「□□太□四年」瓦当は、大同市陽高県で採集された(11)。残念ながら瓦当の外縁が欠け、一つの菱形状の破片だけが残存している。これまで未発見であった紀年銘の瓦当は文献にも記載がなく、１点の破片ではあるが、一級の価値を有する資料である。瓦当面は井字形によって９つの区画に分割される。中央には大乳釘があり、乳釘の外周には凸線の圏線文がめぐる。乳釘の直径は 3.2 ㎝ある。上方の区画には完全な「太」字があり、下方の区画にも文字があるが、不明である。左の区画には「四年」の２字がある。字体は隷書の陽文である。

北魏には太字からはじまる年号が計４つあり、そのうち太昌年号は１年も使用していないので除外することができる。そのほかの３つの年号は４年以上で、「太延」が６年、「太安」が５年、「太和」が 23 年ある。瓦当の下方の一字は、残っている字画から「延」や「和」ではなく、「安」字をもってその欠をおぎなうことができる。

瓦当左側の区画にも２字があったに相違なく、筆者は「大代」の２字があったものと推測する。平城期の北魏は代と称し、『魏書』にも多くの記載がある。たとえば、「天興元年、十有二月……徒六州二十二郡守宰、豪傑、吏民二千余家于代都」(12)、皇興三年（469）「顕祖平青斉、其族望于代」(13)、「鄯善国、……去代七千六百里」、「且末国、……去代八千三百二十里」(14)など、列挙にいとまがない。

また、2000 年に発掘した北魏幽州刺史宋紹祖の墓から出土した磚には、「大代太和元年歳次丁巳幽州刺史敦煌公敦煌郡宋紹祖之柩」とあった(15)。また、2001 年に発掘した七里村M35 出土の磚には「大代太和八年歳在甲子十一……」(16)とあり、「大代萬歳」瓦当も出土していることは、「大」と「代」の両字がつねに組み合わさって使用され、北魏王朝の敬称でもあったことを示すものである。

以上から判断して、瓦当右側の方格内には「大代」の両字があったと考える。この瓦当の文字の全文は「大代太和四年」の６字であったに違いない。

**（ⅱ）蓮華文瓦当**

大同北魏時期は仏教がひろく流行した時期でもあり、社会生活や思想意識などの方面にも大きな影響があった。仏教の観念は社会生活の各方面に浸透し、蓮華文は瓦当装飾文様として次第に盛行していった。

**蓮華文瓦当**　出土品からみると、単弁と複弁に分けられる。乳釘の装飾位置と規格の大小もまた違いがある。瓦当装飾の違いによりⅠ～Ⅳ式に分類する。

Ⅰ式：単弁六弁、操場城倉庫遺跡 T411③：5 は六弁の蓮華文をかざり、みな単弁である。弁は比較的豊満で、瓦当の中心文は頂部が平坦な乳釘文が蓮弁と連結している。蓮弁の間には三角形の突起がある。瓦当裏面には丸瓦が接合している。残長 4.5 ㎝、瓦当径 14.3 ㎝、外縁幅 1.7 ㎝、瓦当厚 2 ㎝。

Ⅱ式：多くは複弁である。方山思遠仏寺 T016：１は中心文が乳釘で、その周囲には圏文がめぐる。蓮華は八弁。瓦当裏面には一部丸瓦が残存し、方形の瓦釘孔がのこる。瓦当径は 14.5 ㎝、厚さ２㎝、丸瓦残長 26.3 ㎝ある。操場城倉庫遺跡 T512③：8 は中心文が乳釘で、外周に圏線文があり、蓮華は複弁八弁で表面に紅色を塗る。瓦当径 15 ㎝、厚さ２㎝。この瓦当は文様の割付が均等で、つくりもよい。

Ⅲ式：複弁の連珠文瓦当である。操場城１号 C3 は黒灰色で、瓦当面はミガキを施す。中心文は乳釘で、その周囲には 15 個の珠文が配される。蓮華は六弁で、蓮弁の間には三角形文がある。瓦当径は 15.7 ㎝、外縁幅 2～2.2 ㎝。方山思遠仏寺 T006：5 は灰黒色で瓦当面は磨かれており、外縁には珠文が一周する。珠文の内側には比較的幅のある圏線がある。瓦当面は複弁の蓮華文で、蓮弁の間には三角形の突起がある。

北魏平城時期は、瓦当で蓮華装飾が流行しただけでなく、その他の建築部材、たとえば門簪や礎石および生活用具にも蓮華図案が用いられた。

宋紹祖夫婦墓から出土した石槨外壁には７つの蓮華文があり、そのうち５つは南壁の門上方の５つの門簪で直径 11.8～12.8 ㎝、そのほかの２つの蓮華は２枚の扉板の円形の引き手で、直径 11～11.7 ㎝。前廊には計４つの平面八角形を呈する廊柱があり、底部の管脚ホゾと上円下方の覆鉢式の柱礎が組み合い、円形覆鉢の上半部には豊満な花弁が高く浮き出た蓮華文で、花弁の先端は下に向かってのびており、細部は陰刻する。

標本 M2：62、M2：63、M2：74 の陶罐と陶壺の器表にも蓮華文が描かれている。葉弁は太く隆起し、花弁先端はやや反りあがっている(17)。七里村北魏墓群出土の標本 M1：10 の直頸罐、標本 M36：3 の釉陶盤口罐は器表に浮き彫りの覆蓮華文が一周している。標本 M1：14、M37：1 の石帳礎石は、円形の鼓面上に花弁の先端を下向きにした蓮華文をかざる(18)。

**複弁蓮華文化生童子瓦当**　方山思遠仏寺、操場城１号遺跡と金属鎂廠北魏墓葬(19)などから出土している。華美で肉厚な連弁の間には、豊かな体でかわいげな童子が飾られる。手には浄瓶を持つか、あるいは両手を十字にあわせている。瓦当文様からⅠ～Ⅲ式に分ける。

Ⅰ式：化生童子は手に浄瓶を持つ。方山思遠仏寺 T010：9 は灰黒色で、瓦当面はミガキを施す。瓦当中央に化生童子が手に浄瓶をささげている。童子の周りには複弁蓮華文を飾る。破片が多いが、瓦当径は 18 ㎝、外縁幅は 1.5 ㎝。

Ⅱ式：化生童子は両手を合掌している。金属鎂廠 M5：1 は灰褐色で、瓦当面はミガキを

施す。瓦当中央には化生童子が座して両手を合掌し、その周りに複弁十一弁の蓮華文をかざる。瓦当はほぼ完形で、径 15 ㎝、外縁幅２㎝、厚さ２㎝[19]。

Ⅲ式：化生童子の縄文瓦当。方山思遠仏寺 T011：2 は灰黒色で、瓦当面はミガキを施す。瓦当中央には化生童子が浄瓶を持ち、外縁内側には２本の縄を撚った縄文が一周する。縄文内側にはさらに幅の広い圏線が一周する。瓦当は欠け、直径約 17 ㎝、周辺幅約２㎝。

雲岡石窟と北朝墓葬にもこのモチーフがある。たとえば大同湖東１号墓から蓮華化生の青銅製品が１点出土しており、全体を塗銀する。中央に蓮華化生があり、細い眉に高い鼻、両手は十字に組む。像の光背には無文の円盤が表現され、光輪の外周に簡単な同心円の圏文がある。像の周囲には 10 組の複弁蓮華文と葉があり、外縁に２つの孔をあけている。孔内には鉄釘やさびなどが残っており、おそらく棺かその他の器具上に固定した装飾であろう[20]。

**（ⅲ）獣面瓦当**

明堂遺跡、操場城遺跡から出土している。北魏平城遺跡の出土瓦当中、高い比率を占めており、典型的な北魏時代の遺物である。建築上を装飾する大量の獣面文瓦当は、一方では建物の威厳をも示すことができ、邪悪な存在を震撼させる作用を引き起こすこともできる。

瓦当面はミガキをかけ、幅の広い外縁をもち、しっかりとしたつくりである。中心には高く浮き出た獣面があり、凶暴で威厳をもち、眼球が突出して短い鼻梁に両耳は先端の尖った円形を呈する。怒った口は大きく開き、そろった前歯と犬歯が露出している。額には比較的深い皺がある。大型の獣面瓦当の直径は 25 ㎝にも達するが、完形品はない。小型の獣面瓦当のデザインの細部には微細な差異があり、犬歯の位置でⅠ式とⅡ式に分ける。

Ⅰ式：鋭利な犬歯が唇の外に露出している。明堂遺跡 96MN：4 は瓦当径 17 ㎝、厚さ 2.5 ㎝。操場城１号遺跡 T610②：11 は土黄色で瓦当径 16.3 ㎝、外縁幅 2.5 ㎝。

Ⅱ式：鋭利な犬歯は唇の外に露出しない。明堂遺跡 96MN：3 は瓦当径 17 ㎝、厚さ 2.5 ㎝。

獣面装飾は屋根に据えるだけでなく、石槨の外側、棺床、門の枕石、門敦、石窟頂部が収束する部分などにも多くみられる。宋紹祖墓から出土した石槨は５世紀の北魏時代の単体建築の貴重な実例であるが、外壁に 26 面のことなる獣面装飾を彫刻する。その機能は、装飾のほかに辟邪がある。古代建築の形態的特徴や装飾を直接的に表現している。

**（ⅳ）人面文装飾瓦**

操場城１号遺跡から６点採取されている。この形式の装飾瓦は、大同地区でははじめての発見である。器表を黒く塗り、ミガキをしていない。平面は半円形を呈し、凸帯の枠を飾る。正面には明確に突出した人面文があり、高い鼻と長い目をもつ、髭は上に巻き、歯が露出している。裏面は平らである。河北省臨漳県鄴北城遺跡で同類の遺物が出土している[21]。

## Ｅ　おわりに

１　平城遺跡から出土した瓦に書かれた文字は数百をこえている。すべて平瓦の凸面と丸

瓦の玉縁凸面に刻まれている。北魏平城時期の「瓦刻文」の新しい書法は今後の研究課題となる。瓦刻文の書体は、隷書、楷書、篆書、行草書の４体がそろっている。一部の字体は隷書に似た楷書、別の字体は楷書に似た隷書など、自由でゆったりとしており、当時民間で流行した魏碑体である。

２　工人の姓名は、瓦刻文の内容の中でもっとも大きな比率を占めている。漢人の工人が80％以上を占めていることは、大規模な造営工事の場における工人組織では漢人が主体であったことを示す。これは文献の記載を証明するものでもある。『魏書』によると、平城造営開始以降、各政権区域から強制的に平城に移民させ、南朝との戦争の捕虜や略奪した財宝を平城およびその付近に集中させた。その移民の数は膨大で、少なくとも 100 万人以上になる。強制移住の対象となった地域は、山東６州、関中長安、河西州、東北和龍と東方の青斉など、いずれも当時の北中国における経済、文化の発達した地方である。移住と同時に注意したいのは、人材と技術の探求であった。ここに集積した労働力と北中国各地から調達された巨大な財によって、平城の内外に大規模な建物を造営したのである[22]。

３　史料には、宮殿の造営工事に関する詳細な記載はないが、一部の瓦の刻文から、建設工事に関する情報を得ることができる。たとえば、数、人、事件などを記したものは、確実に工事と関連するだろう。工事の過程ではかならず規定や規律があり、工人や管理監督員は幾重にも仕事ぶりを検査する。正確にそれを解読することができれば、知りうる情報はさらに多くなり、当時の大規模な工事における労働組織の序列や工事責任制の状況を再現することができる。

４　遺跡から出土した丸瓦、平瓦、瓦当、瓦釘などは、露出する部分にミガキをかけ、のちに滲炭処理をする。表面は青黒色を呈し、光沢がある。建物の屋根はすべて黒色となり、きわめて荘厳であっただろう。これは、北魏が黒色を非常に尊んだことを示している。史料にも「胡俗では水を尊び、またからみあった黒龍を描き、それをまじないとする」とある[23]。

５　明堂、操場城１号遺跡などの大型遺跡の瓦の特徴は基本的に一致しており、規格や製作技法も類似する。ミガキをかけた大型の丸瓦、平瓦と特殊な瓦当の出土は、かつて壮観な明堂やその他の大型殿堂建物が存在したことを物語る。部材は精美で建物も荘厳であり、格も非常に高く、皇室宮殿の規模を示している。同時に、拓跋鮮卑という少数民族の歴代執政者の革新性と勇壮な気勢を知ることができる。

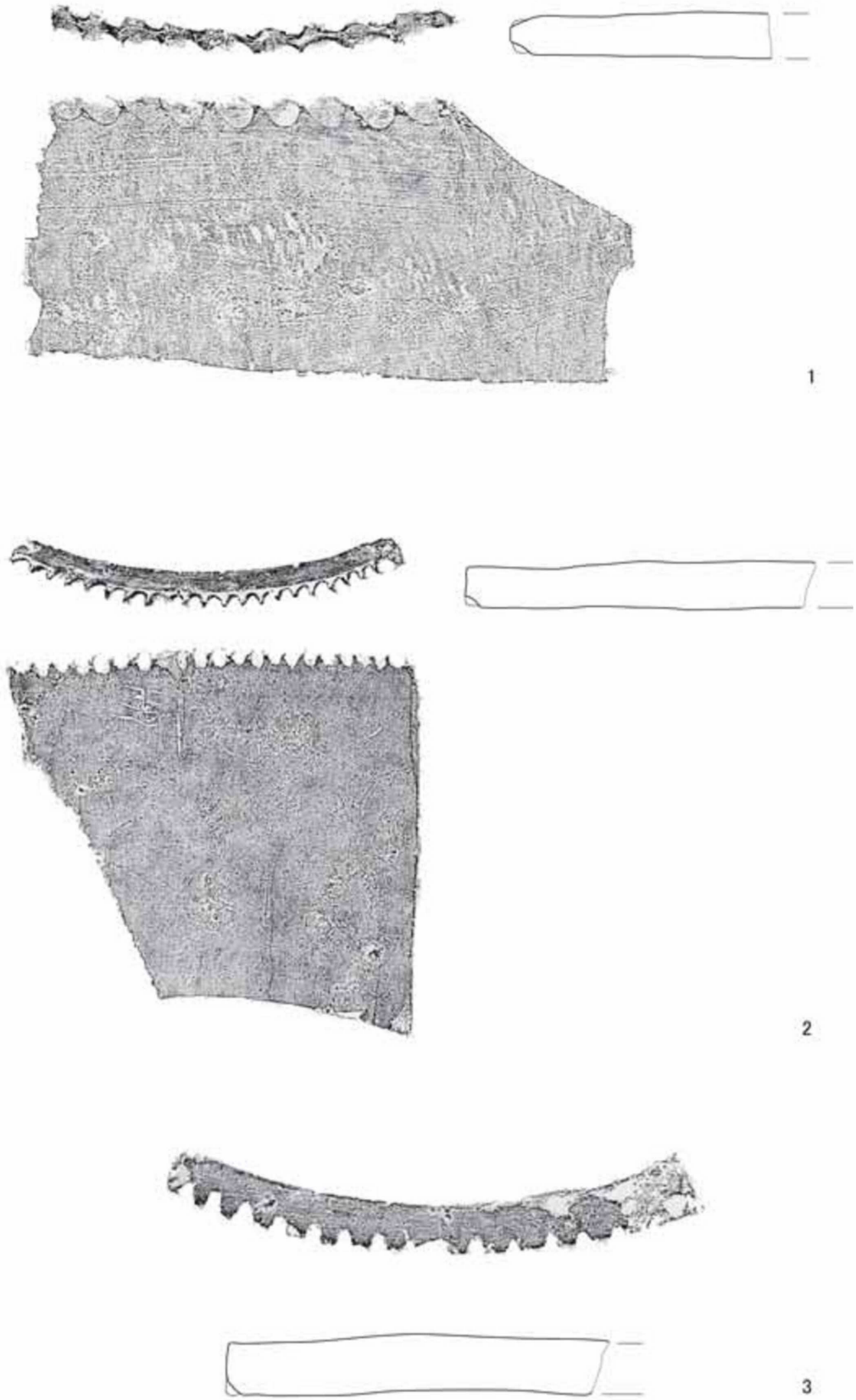
**註**

（１）王銀田、曹臣明、韓生存「山西大同市北魏平城明堂遺址 1995 年的発掘」『考古』2001 年第３期。劉俊喜、張志忠「北魏明堂辟雍遺址南門発掘簡報」『山西省考古学会論文集』３。

（２）山西省考古研究所・大同市考古研究所・大同市博物館・山西大学考古系「大同操場城北魏建築遺址発掘報告」『考古学報』2005 年第４期。

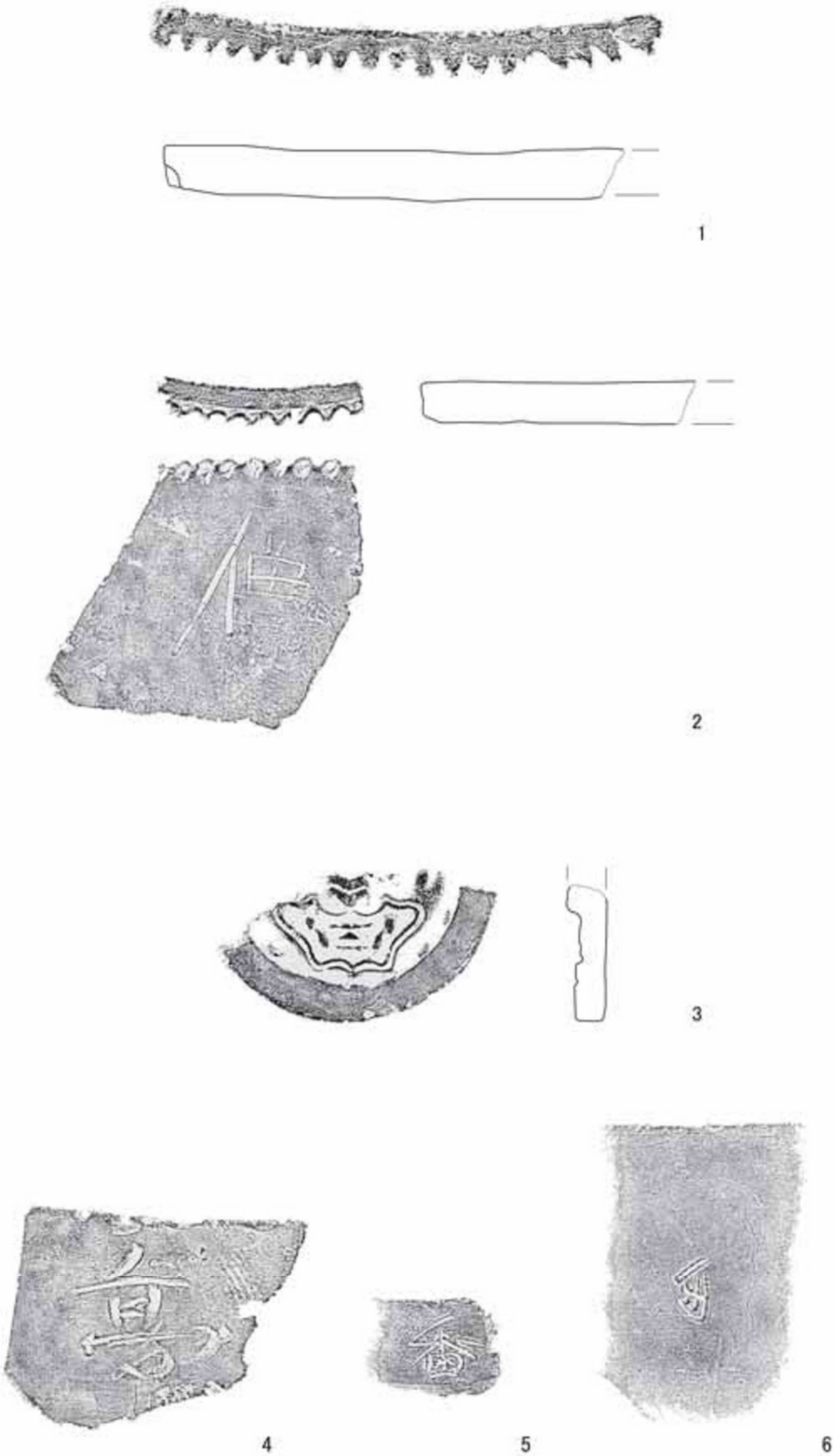
（３）資料は現在整理中。

（４）大同市博物館「大同北魏方山思遠仏寺遺址発掘報告」『文物』2007 年第４期。
（５）雲岡石窟文物研究所・山西省考古研究所・大同市博物館「雲岡石窟第３窟遺址発掘簡報」『文物』2004 年第６期。
（６）中国社会科学院考古研究所編著『中国社会科学院考古研究所考古博物館洛陽分館』文化芸術出版社。
（７）左雁・張海嘯「山西大同出土北魏大代万歳瓦当」『中国文物報』1999 年１月 10 日。
（８）『魏書』巻一 序記第一、中華書局校勘本、pp.7～９。
（９）『大同日報』2004 年 10 月 11 日第５版。
(10)『魏書』巻九十四 趙黒傳、中華書局校勘本、p.2016。
(11) 趙崇寧「北魏文字紀年残瓦当」『考古与文物』1990 年第２期。
(12)『魏書』巻二 太祖紀第二、中華書局校勘本、p.33。
(13)『魏書』巻四十八 高允傳、中華書局校勘本、p.1089。
(14)『魏書』巻一百二 西域傳、中華書局校勘本、pp.2261～2262。
(15) 大同市考古研究所『大同雁北師院北魏墓葬』文物出版社、2008 年。
(16) 大同市考古研究所「山西大同七里村北魏墓群発掘簡報」『文物』2006 年第 10 期、p.41。
(17) 大同市考古研究所『大同雁北師院北魏墓葬』文物出版社、2008 年、原色図版 35。
(18) 大同市考古研究所「山西大同七里村北魏墓群発掘簡報」『文物』2006 年第 10 期、pp.37,38,40。
(19) 韓生存等「大同城南金属金美厰北魏墓群」『北朝研究』1990 年第１期、p.60。
(20) 大同市考古研究所「大同湖東１号墓」『文物』2004 年第 12 期。
(21) 中国社会科学院考古研究所等「河北臨漳鄴北城遺址勘探発掘簡報」『考古』1990 年第７期。
(22) 宿白「平城実力的集聚和雲岡方式の形成と発展」『雲岡石窟第一』pp.178～179。
(23)『南斉書』巻五十七 魏虜傳、上海古籍出版社、上海書店第３本、p.104。



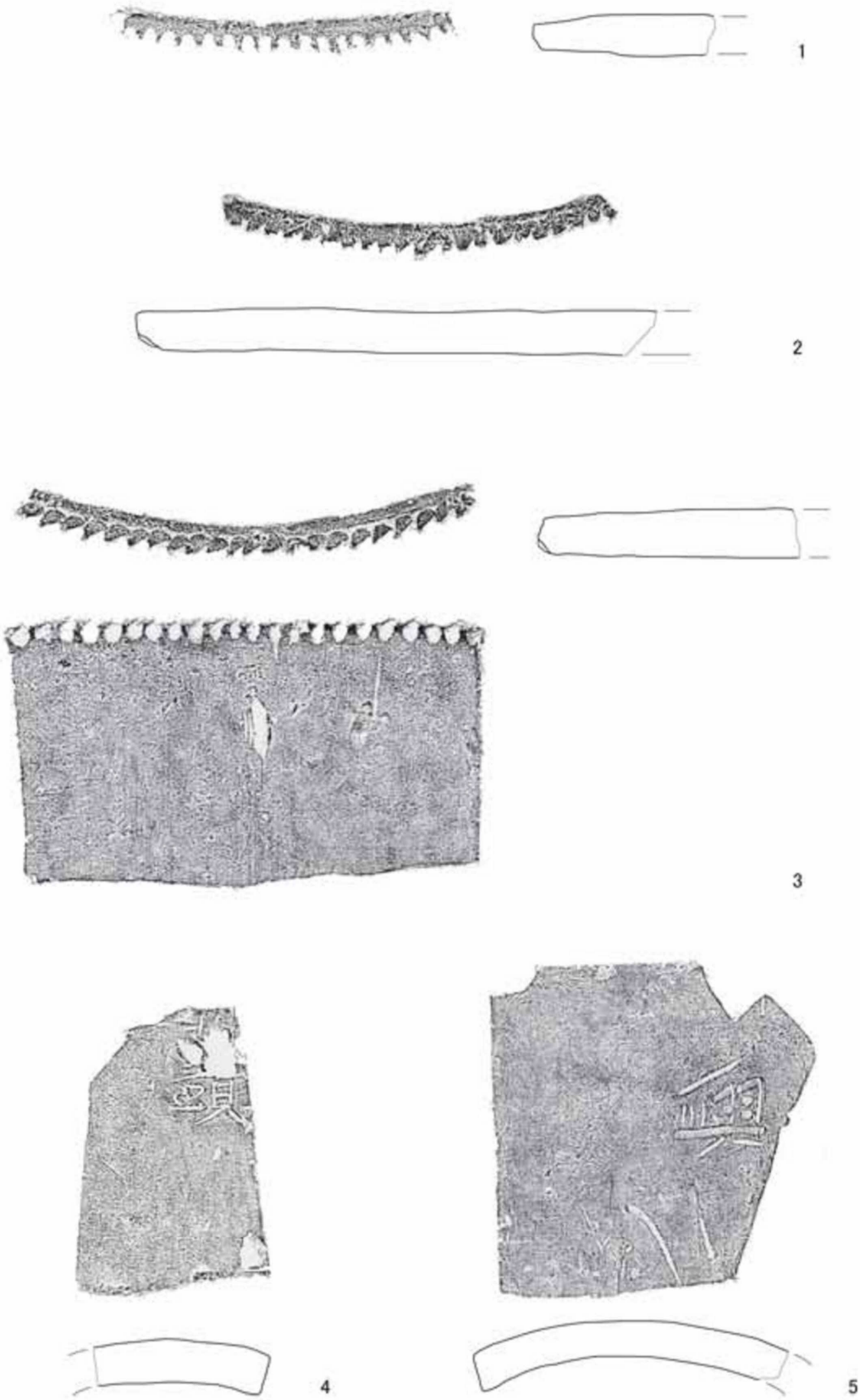

1. T201?　2. T510 ③ :13　3. T410 ③

**附図１　大同平城操場城１号建物出土瓦（1:4）**



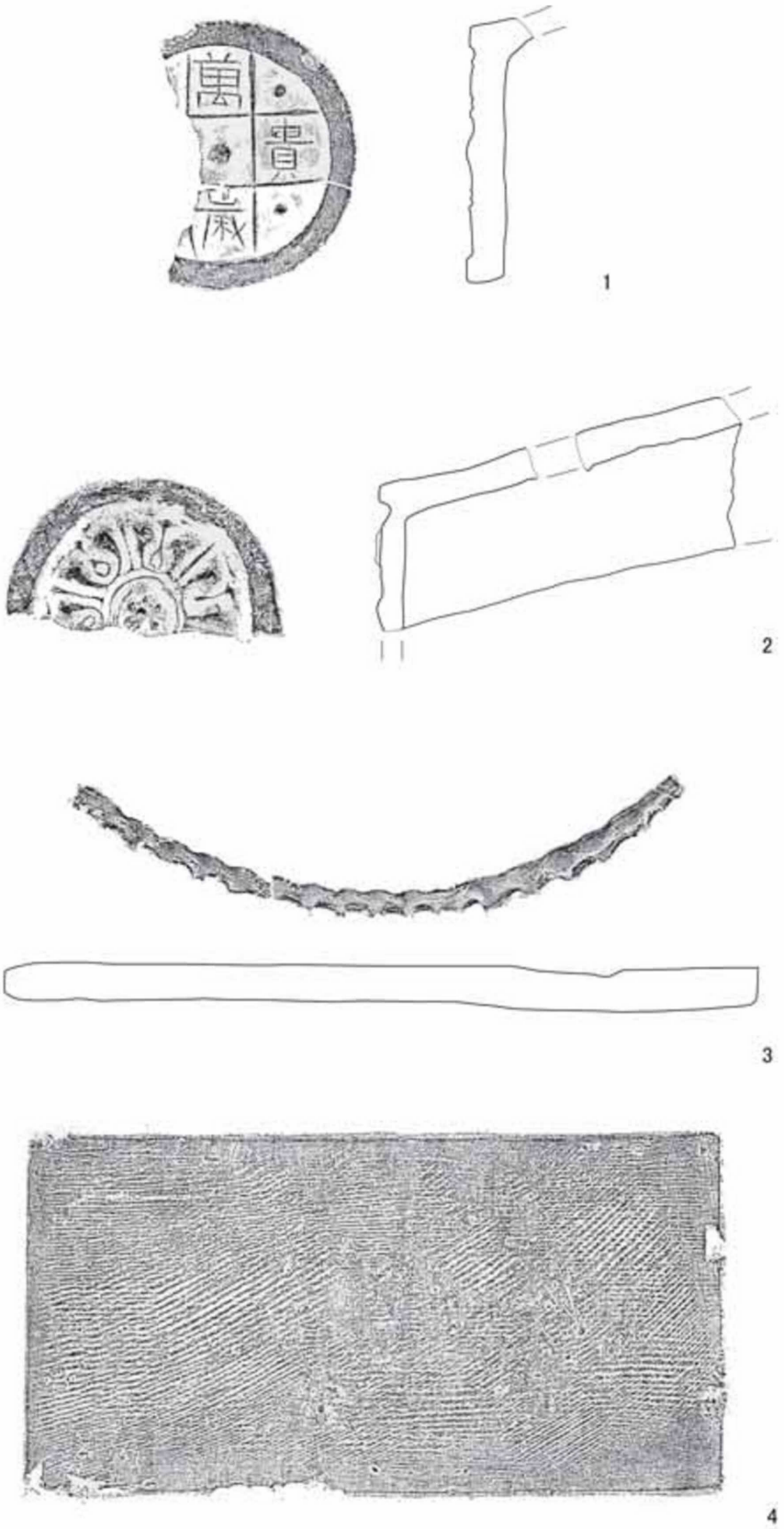

1. 未注記　2. T510 ③　3. 未注記　4. T410 ③　5. 未注記　6. T810 ③

**附図2　大同平城操場城1号建物出土瓦 (1:4)**



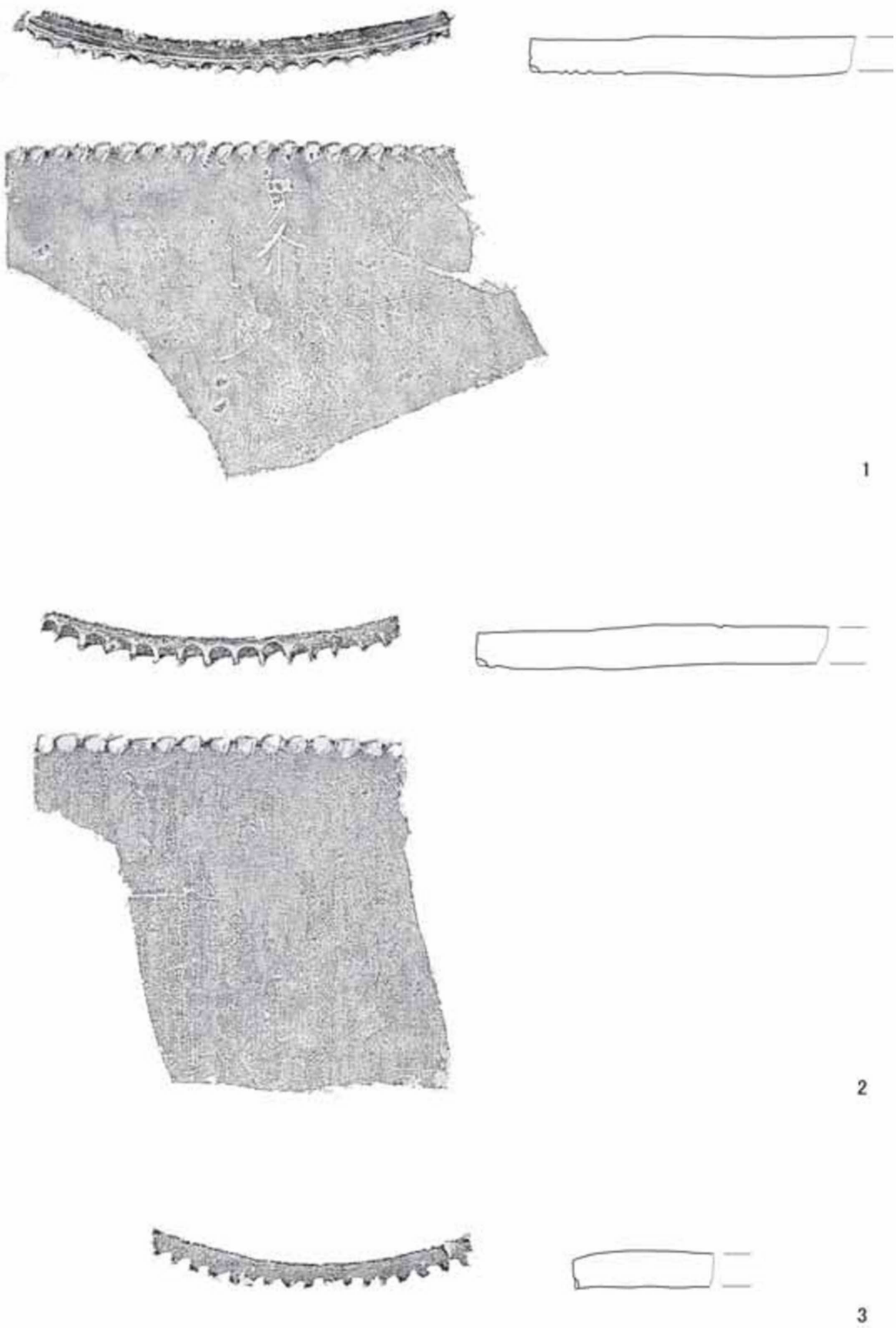

1. 未注記　2. T703-40　3. T703-43　4. 未注記　5. 未注記

**附図３　大同平城明堂遺跡出土瓦（1:4）**




1. 方山思遠寺未注記　2. 方山思遠寺未注記　3. 方山未注記　4. 方山未注記

**附図 4　大同方山思遠寺浮図および方山出土瓦磚 (1:4)**




1. 未注記　2. 未注記　3. 未注記

**附図５　大同平城遺跡出土瓦（1:4）**